

2021年2月17日(水)

祈禱会の皆様、

おはようございます！（夜の祈禱会の皆様、こんばんは！）祈禱会の時間です！

今日からしばらく旧約聖書の哀歌を学びます。

【テーマ】「嘆きと悔い、そして希望」①何てことだ！（イントロダクション）

【聖書のみ言葉】2列王記25:8-12を読みましょう。

【解説】

紀元前587/586年にエルサレムはバビロン帝国によって滅ばされました。哀歌はエルサレムの崩壊という大混乱を目撃した預言者エレミヤによって書かれたと一般的には考えられています。ヘブライ語の聖書では、哀歌の名前は1章1節の最初の言葉をとって「何て」（新改訳聖書では「ああ」）としています。

エルサレムの崩壊は、民が神に選ばれた象徴として誇りにしてきた全てのものの破壊を意味しました（エルサレムの都そのもの、壁と塔、王は勿論、祭司と共にすべての儀式と礼拝、預言と共にすべての夢と神のみ言葉、外国に奪われたエルサレムの地そのもの、命を奪われた民や捕囚とされた民など）。そのため、哀歌が書かれた目的の一つは、生き残った民が、自分たちの感じた恐れと嘆きを表現することにあります。しかし、人は、単に嘆きと驚きを表すのではなく、課題と向き合い、その様々な側面を解釈することによって生きるのです。そして、エルサレム崩壊の一つの側面が罪の意識でした。生き残った民は、この大惨事の責任が自分たちにあると感じていました。

しかし、神の御旨は民が苦しむことにあるのではないこと、神の憐れみは尽きていないことを知ることから希望が始まります。そのため、哀歌が書かれたもう一つの目的は、民が嘆きと後悔を表すだけでなく、悔い改めを通して民の内で希望が表され、強められることにあります。嘆きの状況が一晩で喜びの状況に一変したわけではありません。エルサレム崩壊を通して、民がこれまで慰めの源としてきた全てのものが、剥ぎ取られてしまった今、民は悔い改めをもって神の憐れみを待つように招かれていったのです。

【適用】

私たちも嘆きを経験することがあります。全ての課題が罪の結果ではありませんが、課題の中には罪の結果であるものもあるかもしれません。主は私たちを訓練することはあっても、私たちが苦しむことを願ってはいません。また、神の憐れみは尽きていません。嘆きの中で（場合によっては悔い改めをもって）神の憐れみを待ちましょう（ヘブル4:16）。

【祈り】下記の祈りの課題を覚えて祈りましょう（主に、週報から）。その他にも個人的な祈りの課題があれば、祈りましょう。＊皆さんに共に祈ってほしいということが何かありましたら、牧師までご一報ください。

ありがとうございました！

また来週、配信致します。

百合丘キリスト教会

川井信雄

（「祈禱会の時間です！」の受信をご希望の教会員の方には転送して下さい。その他、通常祈禱会に来て下さっている方にもどうぞ。その際、次回直接メールできるように、私にもCCして頂ければ感謝です。）